

「スペイン姉妹校との国際交流継続を目指した 教師側スキルの考察」

光塩女子学院初等科
茂木俊浩

1. はじめに

光塩女子学院初等科（以下、初等科）はスペインのベリス・メルセス宣教修道女会が日本に設立した、東京都杉並区にある私立のカトリックの女子小学校である。メルセス会が設立した姉妹校は日本国内、世界各国にあり、スペインには光塩の創立者であるマドレ・マルガリタがいらした修道院もある。その近くに位置するビトリアの姉妹校、ベラ・クルス校と初等科は 2015 年より児童が作成したカードを送り合う国際交流を開始した。

初等科は創立当初より英語教育を教育の特色としている。国際交流を始動するにあたってベラ・クルス校と初等科にとって互いの母国語ではない英語で交流することを提案した。将来的には互いの文化や言語を通じた交流を目指しているが、段階を踏んで交流を深める過程として提案した英語での交流は、初等科生にとって、思いの外良い効果があることに気づかされた。それは英語での交流は日本人の児童とスペイン人の児童が、言語的に互いに対等な関係でいられるというメリットである（図 1）（茂木 2016）。

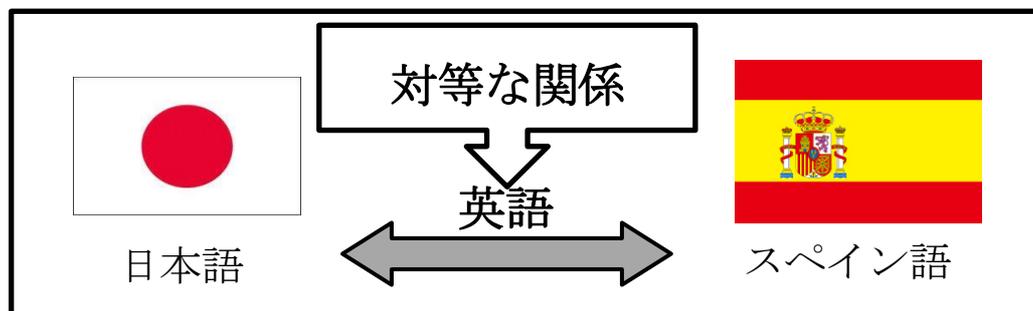


図 1. 英語を仲立ちとした日本語とスペイン語の関係

2. 国際交流継続に必要な言語的スキル

学校間の国際交流を推進する教員には最低限必要な言語的スキルがあると考えられる。初等科の場合、学校間の連絡は英語の E メールで行ない、両校の児童が作成するカードの内容をチェックする際にも英語を使う必要がある。

また、スペインの姉妹校と交流しているので、英語だけ出来れば満足と安直に考えるのはもったいないと私は思う。今後、世界はより近づき、日本国内にいても多くの国籍・言語を背景に持つ人と関わる機会を持つ時代がやってくる。私は光塩の独自性はスペインとのつながりにあると確信し、2013 年、一からスペイン語を勉強し始めた。スペイン語を勉強するのは、相手の文化をより深く理解するため、将来互いの国を行き来する交流に発展した際に簡単な通訳の役割を私ができるようになるためと考えている。

2020 年に小学校高学年で導入される教科「外国語」として英語を教える場合には、教師自身の英語の技

能の他に教授法についても研修を重ねる必要があるが、本研究はあくまで国際交流継続に必要な言語的スキルについて指摘するだけに留め、教授法を含んだレベルへの展開は今後の研究に譲りたいと思う。

この2年間で私は以下の5種類の外国語検定を受験した(表1)。

表1. 私が受験した外国語検定

言語	検定名	結果
英語	英検 CBT 2級	合格
	OPIc ¹	Intermediate Mid 1
スペイン語	スペイン語検定 3級	合格
	OPI スペイン語	Intermediate Low
	DELE ² B1	不合格

文部科学省(2013)の中教審答申によれば、以下の通り、国が求める語学水準が示されている。

「2. 未来への飛躍を実現する人材の養成 【成果指標】 <グローバル人材関係>

①国際共通語としての英語力の向上

・学習指導要領に基づき達成される英語力の目標(中学校卒業段階:英検3級程度以上,高等学校卒業段階:英検準2級程度~2級程度以上)を達成した中高校生の割合50%(…)

②英語教員に求められる英語力の目標(英検準1級、TOEFL iBT 80点、TOEIC 730点程度以上)を達成した英語教員の割合(中学校:50%、高等学校:75%)」

すなわち、教師は児童生徒の1から2段上のスキルが必要といえるだろう。一方、小学校では中学年から外国語活動が開始されると、単純計算で3分の2の教員が外国語に関わる必要がある。この状況を考えると、CEFR B2レベルを全国の小学校教師が習得するのはあまりに現実的ではないように感じる。

OPIcやOPIスペイン語とは、一般社団法人Global 8のホームページに以下のように示されている³。

「外国語でのコミュニケーションに必要とされるのは、単純に文法や語彙をどれだけ知っているかではなく、実際のビジネスや生活の場でいかに効果的で適切に言語を使えるかです。OPIcは、その言語駆使能力を客観的に測定できるテストです。」

英語4技能試験情報サイトでは検定間を横並びに比較可能で、英検の準1級がCEFR B2、2級がCEFR B1と対応している⁴。ACTFL(2016)によれば、CEFR B1はIntermediate Mid IMに対応している。

以上を総合すると、小学校教員が目指すべき語学レベルはCEFR B1程度が現実的ではないだろうか。

3. 語学検定の比較

私が受験した検定について、所要時間と受験した印象の2つの観点から比較検証する。

3-1. 所要時間の比較

検定を受験した申込締切から結果が発表されるまでの時間を所要時間として、表2の通り比較する。

英検CBTとスペイン語検定は約70日でほぼ同様の所要時間であることがわかる。また、OPIcとOPIス

¹ OPIc: Oral Proficiency Interview-computer

² DELE: Diplomas de Español como Lengua Extranjera

³ 一般社団法人Global 8「What's OPIc」<http://www.global8.or.jp/whatsopic01.html>

⁴ 英語4技能試験情報サイト http://4skills.jp/qualification/comparison_cefr.html (2017年7月10日更新情報)

ペイン語は1週間から2週間程度と明らかに所要時間が短いこともわかる。そして、DELEは最も所要時間が長いことがわかる。DELEの所要時間がかかる原因としては、日本で回収された答案をスペインに送付し採点するためことにあるようだ。

表2. 受験した検定の所要時間の比較

検定	申込締切	1次試験	2次試験	結果発表	所要時間
英検 CBT 2級	2017/12/25 (年3回)	2018/1/14	2018/2/25	2018/3/8	約 <u>70</u> 日
OPIc	随時	2017/9/29	なし	2017/10/3	最短 <u>14</u> 日
スペイン語検定 3級	2016/5/30 (年2回)	2016/6/19	2016/7/24	2016/8/10	約 <u>70</u> 日
DELE B1	2017/10/3 (年3回)	2017/11/25	2017/11/25	2018/1/31	約 <u>120</u> 日
OPI スペイン語	随時 (2018/2/22)	2018/3/1	なし	2018/3/2	約 <u>8</u> 日

3-2. 試験当日の印象の違い

それぞれの検定を私が受験して受けた印象を以下の表3、4に示し比較する。

表3. 私が受験した検定の特徴①

比較項目	英検 CBT 2級	DELE B1	スペイン語検定 3級
規模	1次：英検専用の常設会場での受験、2次：借りた会場だが、ともに規模が大きい	1日全日を利用し、借りた会場で、1次・2次試験を実施	借りた会場で1次試験を実施し、2次試験は検定運営をする機関の建物で実施
受験者層	小学生からリタイヤされた年齢の方まで多様	高等学校・大学生が多く、他の層はほとんどいない	高等学校・大学生から社会人やリタイヤされた年齢の方など
試験概要	1次：CBTで筆記85分・リスニング25分は自分のペースで受験可能 2次：対人の面接試験でスピーキング約15分	1次（午前）：読解70分、聴解40分、文章表現60分 2次（午後）：口頭表現15分	1次：読む・書くが90分間（日文西訳10題、西文日訳10題） 2次：面接（口述）は10分弱。
雑感	私のレベルで検定の準備を全くしないで受かる程度	4技能を満遍なく評価され、丸一日かかり疲弊	日本人が高校や大学において机上で勉強した内容が問われた印象

表4. 私が受験した検定の特徴②

比較項目	OPIc	OPI スペイン語
受験場所	PCが準備できれば、場所を選ばない。	
試験概要	オリエンテーション20分、テスト40分で実施され、その日の体調によりテストの難易度も変更可能	本人確認のオリエンテーションも含め30分程度
受験方法	PC上でロボットとのインタビュー形式でコミュニケーション能力を評価	国際電話でインタビュー形式
雑感	結果発表までの期間が非常に短く、実力の現状把握に向いている印象	結果発表までの期間が非常に短く、実力の現状把握に向いている印象

4. 私立小学校教員に求められる語学スキル

2020年から全国の小学校5・6年生で始まる教科「外国語」と3・4年生で始まる外国語活動に向けて、小学生の数レベル上の語学力を持った教員の育成が急務と言われている。一方、光塩のような私立小学校はさらなる特色が求められる。勤務校の特色を推進する教員サイドの語学レベルは英語や英語圏の文化に限らない、より広い世界を子どもたちに見せるため、最低限の英語においてはCEFR B1レベルを持ち、さらに他言語でもCEFR B1レベルを目指していくことを目安としたい。

私の受験結果は表1の通りであり、現在の私の語学能力は英語はCEFRでB1レベル、スペイン語はA2レベル程度であると推定される。現状ではスペイン語を初等科生に教えらるるレベルではないことは私自身が持っている印象とも合致しており、語学検定は自分の印象を客観的に示すデータや裏付けにもなることがわかった。

5. 語学検定を受ける意味

以上の実体験を踏まえて、語学検定を受けるモチベーションについて、再確認する。

- 自分の実力を相対的に確認する…自分に足りていない点が明確となり、今後の学習意欲が向上する
- 学習の目標として受験する…大学受験に有利、試験に合格する喜びなど

これらのバランスは受験者の置かれた状況にもよるが、語学検定を受験するなら、望まれる能力が判断できる適切な語学検定を受験することが大切だということを実感を持って経験することができた。

教師は概して評価される機会が少ない。しかし児童生徒同様、教師こそ常により高くを目指す姿勢が求められると私は再認識した。

6. 結論と今後の課題

文科省の目標設定「英語専門の中学校教師50%はB2を取得」を考慮し、外国語が専門ではない小学校教員が持つべき英語レベルの指標の目安はCEFR B1、OPIcではIM、英検2級程度が適切と結論づける。

今後は教科「外国語」との兼ね合いも考慮し、教授法なども併せた研究を重ねる必要があるだろう。

参考文献

茂木俊浩 (2016) 「スペインの姉妹校との交流に向けた準備と実践 ―私立学校独自の国際交流を目指して―」『複言語・多言語教育研究』4, pp.33-54

文部科学省 (2013) 「第2期教育振興基本計画について (答申)」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/08/1334381_02_2.pdf (2018年3月18日閲覧), p.74

吉島茂他訳編 (2004)、『外国語教育Ⅱ―外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠―』, ゲーティンステイトゥート

ACTFL (2016) "Assigning CEFR Ratings to ACTFL Assessments",

https://www.actfl.org/sites/default/files/reports/Assigning_CEFR_Ratings_To_ACTFL_Assessments.pdf (2018年3月18日閲覧), p.4